

## あらひとがみ、ちきゅうを救う

た。ベランダで蹲り、むせび泣く母の脇に座ると

あ、

「お星様が落ちてくるよ」

と君が言った。口元を綻ばせて。  
なに？

と、幼い僕は言った。哀れな自分を慰めようと、空想好きな息子が優しい言葉をかけてくれている。そう思った母は僕を抱きしめようと顔をあげた、そのとき、空一面

と僕が尋ねると、

何でもない。

と、笑う。

を流れる星が覆った。

僕は君を笑わせる何かに少し、嫉妬した。

僕は八年間、現人神として生きた。山の

地球はあと一時間で滅びます。と、**彼**は言った。午後三時十五分になったと同時にこの世界は滅びます。あなたは一体、何をしていたのですか？ と**彼**は尋ねる。あなたが今まで食べられなかったような、おいしい物を食べることができません。今まで抱いたことのないような、いい女とHができます。何でも叶えてあげよう。と、彼は慈しみに満ちた微笑みを浮かべる。その笑顔に腹がたつた。僕を子供のときから見守り励まし続けてくれたその笑顔が、そのときの僕には許せなかった。僕は**彼**の顔を殴打した。何度も何度も、こぶしを夢中で振り下ろす。気がついたときには**彼**の姿はもうなかった。

母が首を吊って死んだ。

僕の言葉を虚言だと吹聴した人を毒殺したためだ。逮捕された直後のことだった。

**彼**に触れたのは初めてだった。血まみれになった両手のこぶしには確かな感触が残っている。痛みがあることが意外だった。

僕は、**彼**の声が聞ける。子供の頃からだ。

**彼**と話した日の夜、必ず夜空に流星が降る。そのことを話すと、母は怪訝な表情を浮かべ、僕の今後を心配した。

自分が恥ずかしかつた。勃起できない僕は、液で濡らし僕の物を押し入れる母の姿は、哀れだった。

僕が八つのとき、父がよそに女を作って

出て行った。その日も、僕は**彼**と会話をし

母には信じるものがあつた。ただそれだけのことだ。

